

## 妻の歌 黒岩剛仁

今、必要があつて、昨年刊行された歌集のいく冊かを読み返している。その中で、私より若干年上である二人の歌人の〈妻〉を詠んだ歌が特に印象に残った。

まずは、昨年十月号の「歌壇」にも書評を書かせてもらった、柳宣宏の『丈六』から。

- ・ おむすびを一つ食べたと病む妻の携帯のこゑホームに聞きぬ
- ・ わが妻は第二十九班班長にて町内会の精鋭らしき
- ・ この家に妻と暮すも新年の朝のはじめに会ふは照れたり
- ・ 裏の木の柿の若葉につつみてぞ鮎を握りし妻が若き手
- ・ 背を丸め珈琲を飲むわが妻は洗濯物を干し終はるらし
- うーん、いいなー。四首目の柿の葉鮎の歌は、新婚の頃の妻の手を回想しているのだが、他の歌も何とも初々しい。とても私より年上（奥様の年齢は不明だが）の人の作とは思えない。そんな婦恋の歌を詠む作者ゆえに、「島田修三夫人告别式」に際しては、〈妻なしとなりける島田の手を握り言ふことかある妻あるわれに〉という歌が生まれるのだ。

その島田修三は、昨秋、ほぼ同時に二冊の歌集を上梓した。第八歌集『露台亭夜曲』と第九歌集『秋隣小曲集』である。どちらも編年体で纏められており、前者が二〇一三年〜一六年、後者が一七年〜二〇年初夏の作品ということになっている。

『露台亭夜曲』に収められた〈妻〉の歌は、実は少ない。知りあひてたちまち媾合におよぶ是非めぐり爪塗る妻と論議す・月蝕を妻と仰げるたまゆらをロマンチックといはむかいはず・戦艦の砲塔めぐらすからくりを俺は知れども妻は知らざり「媾合」という言葉からは斎藤茂吉を想起させるし、「妻」を飽くまで「さい」と読ませるのはいかにも島田である。それはともかくとして、この三首、「妻」を愛しんでいるというよりは、付き合ひの長い悪友といった趣きである。そして、それが二人の夫婦関係を物語つていいいな、と思うのだ。

先に書いたように、島田は妻を亡くした。一八年八月のことである。当然、『秋隣小曲集』にはそれになつたる歌が多く収められているのだが、そのどれもが心を打つ。

- ・ かたはらに守宮の可愛ゆき鳴きごゑを語つてくれた人あらなくに
- ・ 行つてくるよ などと呟きながら朝戸出の凍てつく時間を漕ぎ出でむとす
- ・ なつかしくその思ひ出を歌はむ日あらなるべし大根煮るなり
- ・ この椅子に人定まりて座れるをしんと思ひぬ納豆こねつつ
- ・ ほのぼのと淡く点れる一生にて朝の螢のやうに消えにき
- ・ 寝ねぎはのたまゆらを浮かぶ面立ちの右やはらく哀しげに左
- ・ 誰に見よとおもふころや匂ひたつ笹がき牛蒡を水にぞ放つ
- ・ 家事嫌ひの女と生きたる歳月の豊けきかなや餃子包みつつ
- ・ お父さん、どうよ、どうよと鉢を抱き俺に見せにき可愛かつたんだ

私も、こんな歌を物したいものだ（もともと妻はいないが）。